

【一般口演1】 第1席

金元鍼灸における『衛生宝鑑』

神奈川 上田善信

金元医学は宋代までの医学を基として発展し、金元四大家といわれる劉完素、張從正、李東垣、朱丹溪を輩出した。金元時代は医学全体が百家争鳴の如き時期である。この時期の鍼灸についていえば、それまで鍼灸治療の中心であった灸法が、鍼法に取って変わられたように思われるくらいに、鍼法の専門化が進んだ。そのことは寶黙『鍼経指南』（1295）の後世への影響をみれば明らかである。明清鍼灸や近世日本の鍼灸に対する金元鍼灸の影響の大きさは、決定的なものとなっている。

『衛生宝鑑』24巻・補選1巻は1283年に成立した医学全書である。本書の成立年代については、上記の説以外に①1281年（『全国中医図書連合目録』など）、②1343年（『中華古文献大辞典』『中国鍼灸文献提要』『三百種医籍録』など）の説もあるが、今は『現代東洋医学』所載の「漢方古典文献概説」に従っておく。本書の巻1～巻3「薬誤永鑑」は誤治の戒め、巻4～巻20「名方類集」は古今の名方の運用法で、本書の中心をなす部分、巻21「薬類法象」は薬物の性味効能、巻22～巻24「医驗記述」は自己の治験例、補選1巻は後人の増補である。

著者の羅天益は字を謙甫といい、生没年は明らかではないが、李東垣の晩年の弟子であり、東垣の信任が篤く、師の理論を継承敷衍した功績が大きい。また、鍼灸に関しては寶黙について鍼法を学んでいる。

本書は医学全書でありながら寶黙、雲岐子などの医家の鍼灸に関する記載も多く、明代の楼英『医学綱目』や張介賓『類経図翼』に徴引され、近世日本では曲直瀬道三『啓迪集』に多数の引用があり、金元鍼灸の一端を窺い知る上でも重要な医学書である。